

正しい認識が成功に通じる

人生をよりよく生き抜くためには、人生のみならず自分自身についての認識が必要である

大江 弘

PHP総合研究所 松下理念研究部主任研究員



おおえ・ひろし
一九六一年富山県生まれ。八六年富山大学文学専攻哲学コース卒業、PHP総合研究所入所。現在、松下理念研究部主任研究員。二〇〇〇年、総理大臣の私的諮問機関教育改革国民会議にて教育改革国民会議担当室主幹。主に松下幸之助の人間観、人生観等、思想の根幹について独自の研究を展開

認識することからものが生まれる

「いかなることでも認識することによって、ものが生まれてくるということを知らなければならない。かりに私がいま銀座を通る。彼女にプレゼントするのに、これはいいなあと思っても、自分の財布にカネが足りながらカネがあることを認識しなかったら、これは買うことができない。つまり、自分には実際十の力を持っておっても、持っているということを確認しなかったら、

力はないと同じだ。だからすべて認識することが大事なのだ」

この松下幸之助のことばは、もちろんお金や自分の能力のことだけを問題としているわけではない。たとえば、誰も一度や二度は、道を歩いていて低い段差につまずき転びそうになったことがあるはずである。何かに注意を奪われていたか、ぼんやりしていたか、いずれにしろそれは、足下の段差を認識していなかったために起こした失敗だろう。仕事においても同様である。仮

に目の前に大きなビジネスチャンスが巡ってきたとしても、それを認識しなければ、みすみす逃すことになってしまう。これはチャンスだ、良いアイデアだと認識すればこそ具体的な行動を起こし、チャンスをわがものとすることができても成果も生まれてくるのである。

さらに松下は、天地自然の理に導かれてこそ人間の繁栄は実現されるという自らの考え方を前提とし、「世の中のあるがままの姿をあるがままに見るのが天地自然の理に

適うことだ」と述べている。

昔、火というものは、他の動物にとつてと同様に、私たち人間にとつてもただ恐いだけのものにすぎなかった。ところが、やがて人間は、火は火傷してしまふほどに熱いものだが、適当な距離さえおけば暖かいことや、燃料や送る空気の量で大きさを調整できること、また水などをかければ消すこともできる等の火の性質、いいかえれば火に関わる道理というものを認識するようになる。

人間が寒さに震えることもなく、また焼いたり煮たりした美味しい食べ物をお口にするなど、より豊かな暮らしを実現できるようになったのも、そのように火の性質、道理というものを正しく認識し、上手に活用できるようになったおかげにほかならない。

こうしたことは火にかぎるものではない。私たちの生活は、この世の中のさまざまな法則や道理をあるがままに正しく認識し、それに反することなく上手に活用することでより豊かになってきたと考えることができる。そのようなことからすれば、松下のいうように、人間の繁栄を実現するためには天地自然の理に適うことが必要であり、そのためには、世の中をあるがままに正しく認識するということがまず大切であ

るといえるだろう。

また松下は次のようにも述べている。「的確なる認識、これはわれわれの事業の上においても最も必要なことであつて、いかに努力するも誤つた認識の上になされるときはムダであり、失敗に終わるものである。静かなること林のごとく、冷徹水のごとき理知をもつて、正しき認識のもとに的確なる方針を樹立し邁進することによつてのみ、成功をかちえられるものと考え、事業にかぎらず何事も、その成否は私たちの行動如何にかかつている。たとへば、目的地に通じている右の道と、まつたく別な方向に向かう左の道があつたとする。このとき左の道を歩きだしたとしたら、どれほど時間をかけ、懸命に歩いたとしても目的地にたどり着くことはできない。やはり目的に適つた行動をとることが大切である。

そしてその目的に適つた行動をとるためには、正しい判断を下す必要がある。なぜなら私たちの行動は、私たちの判断に基づいてとられるものだからである。目的にたどり着く道を歩むという行動をとることができるのも、右の道を行こうという正しい判断があればこそである。

それではその正しい判断を下すにはどうすればよいのか。

私たちの判断は、ものごとに対する認識によつて決定される。右の道が目的地につながる道であるとの認識が、私たちに右に行こうという判断を下させる。もとより認識を誤れば判断も誤らざるを得ない。正しい判断は正しい認識によつて可能となるのである。

したがつて、ものごとを成し遂げ、成功しようと思ふのであれば、松下のいうように、まずは的確な認識、正しい認識がなくてはならないといえるだろう。

以上、見てきたことから明らかによつて、松下は、まずは認識すること、そして正しい認識をもつということをきわめて大切にしてきた。おそらくそうした認識についての考え方が、松下のものの見方、考え方の原則の一つとなつていたのでないかと思われる。そこで以下において、さらに認識ということについてどのように考え、また述べていたかを詳細に見てゆくことにしよう。

認識の誤りは一国の存亡にも関わる

松下は戦前から、認識するということ、正しい認識をもつということをきわめて大切だと考えていた。しかし松下の考え方の中における認識の重要性は、戦後において

さらに高まっている。戦後になると、話題として取り上げる機会が多くなるだけでなく、経営関係以外の事柄の中でも幅広くその意義を訴えるようになってきているのである。戦争敗戦という大事件との関わりの中で、松下は認識ということについてどのように考えたのだろうか。

戦争そして敗戦は、日本経済を破綻^{はたん}させ、国力を大きく疲弊させる結果に終わった。特に敗戦直後は、国土は荒廃し、人心は乱れ、多くの国民がきょう、あす、食べるものにさえ事欠くというような窮乏の生活を強いられた。松下にしても敗戦はきわめて衝撃的な出来事であり、事業経営はかつてないほど危機的な状態に陥った。

そうした中、松下はなぜ日本はこんな戦争をしたのか、また敗戦にいたったのかと、切実な思いで自問自答を繰り返している。そしてさまざまに思いを巡らし、考えあぐねたすえに、次のように結論づけている。「日本人が、日本の国の力を申しますか、総合の力というものをどのように認識しておったかどうかということを考えてみますると、ある程度、認識はしておったでありましょう。けれども非常に正しい意味において認識ができておらなかった。その認識を欠いた形において、あの大東亜戦争を決

行したんであります。完全に失敗することは当然だと申していいと思うんであります」

戦争は国家の一大事である。そう簡単に決行できるものではない。おそらく日本が戦争を決行するにいたるには、数々の要因が複雑に絡み合っていたにちがいない。また敗戦にしても、それを最終的に決定づけたものはあるにしろ、実際にはさまざまな要因が幾重にも重なった結果であろう。これこそが戦争を決行した要因である、敗戦の原因であるというものが、そう容易にかめるものではないように思われる。ところが松下は、日本が戦争をしたあげくに敗戦にいたったのは、日本自身が相手国や自国の力に対する認識を誤っていたからであると、誤った認識が失敗を招くのは当然だという。

自国、相手国についての認識をもっていたかどうか、認識をもっていたとすればその認識は正しいものであったかどうかという認識の問題を、松下はかつてないほどの苦悩をもちたらしめた戦争、敗戦の根本的な原因と見ているのである。

経営者に欠かせない認識

ある経済学者が、安定した経営を行う上

で経営者が最も自戒すべきことは何かと松下に尋ねた。これに対して松下は、「経営者たるものは自社認識を誤ってはいかん」と答えている。またある講演会では、「倒産会社でありますとか、あるいはまた行き詰まった商店でありますところを仔細^{しさい}に観察いたしますと、全部自己の実力の認識の判定の誤りにあると考えられるものが非常に多い」と述べている。経営者にとってまず問題なのは、自社の力に対する認識であり、そのありようによっては会社が倒産しかねないというのである。

たとえば経営者が自社の力を過信し、うぬぼれている場合、折々になされる経営判断、施策は、ともすると実力以上の無理無謀なものとなりがちである。もとより無理は続くものではない。どこかで必ず破綻することになるだろう。逆に、経営者が自社の力を過小評価している場合には、せっかくの飛躍のチャンスが目の前にあっても、みすみす逃してしまふような消極的な判断を下しがちである。それではむろん会社の成長は望めない。たしかに松下のいうように、過信にしろ過小評価にしろ、自社の力に対する誤った認識は、経営を誤らせる原因になると考えられる。

しかし考えてみれば、こうしたことは、

ばよいかということについて、いかに真剣に考えていたかがうかがわれる。晩年には、自らの私費を投じて松下政経塾まで設立している。そうした松下が、政治を好ましいものとするかどうかは、政治家や国民一人ひとりの政治に対する認識次第であるという。松下にとつては政治の良否もまた、これをどう認識するか、またその認識が正しいものかどうかという認識の問題と関わっているのである。

いかなる認識をもつかが人生を決する

私たちは誰しも今生きている人生をより意義深いものになりたいと願っている。さまざまな困難に悩み苦しむつも、日々懸命に生きているのは、そうした願いがあればこそだろう。それではどうすれば、人生をより意義深いものにすることができなのか。

松下はこの問いに対して、「その実現のためには、やはりまず、人生とはどういうものか、ということについての正しい認識が必要でしょう。人生とは何かということがある程度はつきりつかめてこそ、よりよき人生をめざす努力も具体的で力強いものになり、実際の成果もあがってくると思うのです」と答えている。

また松下は、人生をよりよく生き抜くた

めには、人生についてのみならず、自身自身についての認識もきわめて大切であると述べている。

たとえば一つの見方として、人生をより意義深いものにするためには、自分の適性にあつた仕事、生き方をすることが大切であると考えられる。しかしそのためには、自分にはどのような個性、特質があつて、どのような仕事、生き方に適性があるかを知らなければならぬ。自分についての正しい認識がなくてはならないわけである。腕力のない人が腕力を必要とする仕事についたならば、なかなか成果はあがらず、周りにとつて迷惑なばかりか本人にとつてもつらいだけだろう。だが、腕力のある人であれば、同じ仕事であっても、大いに成果もあがり本人もやりがいや生きがいを感じるのではないだろうか。結局、自分についての認識如何、さらにはその認識に基づいた自分の生かし方如何で、人生が楽しくも苦しくもなるといのである。

あるいは松下は、自分についての認識と幸せに関して次のようにも述べている。

「自分の幸せ、これは人間として非常に大事なことでありますが、自分が今幸せな立場に立っていることを、どの程度に認識できているかが、きわめて大事であると思

うんです。自己認識というものはなかなかできにくいもので、はたから見ると非常に立派な人やな、あの人は幸福な人やなと思われ人でも、本人自身は、あまり幸福感をもっていない。むしろ何らかの不満をもっているというような人が比較的多いように、私は今日までの体験でよく感じるんであります。そういうことで、やはり自己認識というものは非常に大事やと思つてです」

どれほど幸せな状況、立場にあつたとしても、本人がそれを認識しなければ幸せだとはいえない。たとえば、今日の日本に住む私たちは、世界の多くの国々と比較すれば、平均以上のきわめて恵まれた暮らしをしているのはまぎれもない事実である。しかしそうしたことも認識していなければ、人によつては、松下のいうように不満ばかりを口にし、自分を不幸であるとさえ考えかねない。幸せを幸せと感ずることができかどうかは、自分について認識することができるかどうか、またその認識が正しいものであるかどうかにかかっていると考えることができるというわけである。

いかに正しい認識をもつか

ここまで見てきたことからして、何事においても、まず認識するということが大切

